

亡命地としてのアルゼンチン アントニオ・ホセ・ポンテとカリブ文学研究をめぐって¹

久野 量一

はじめに

自分が育って足場を築いてきた場所は、自分の書いたものが読まれる可能性が高いところである。書き手は自分の書いたものを受け止めてくれる身近な読者を想像しながら書くことが多いだろうし、執筆に用いる言語、どのジャンルを選んで書くか、どんな内容を書くかは、多くの場合、書き手が属する「場所」と何かしらのつながりがある。

とって、書き手とは関係が無い、あるいは関係が薄いところに読者がいないかというところでもない。自分の書いたものが翻訳されたり、そのまま出版されるのは当たり前のことである。自分の作品が自分の場所では事情によって出版できない作家の場合——そういう作家の数は少なくないはずだ——、自分とは関係がないにもかかわらず、惜しみなく出版の苦勞を請け負う人がいて熱心な読みを行なってくれる場所があれば、そこそ自分の存在にとっての「場所」になる。作家にとってそこが本当の亡命先になることもあるが、たとえ実際に住んでいなくても、そこは文学上の「亡命先」や「避難所」と言っていいたいだろう。このような場所が存在すること、そしてこういう場所での文学の受容が世界の文学史のある部分を形作っている。

その意味で、アルゼンチン（とくにブエノスアイレス）は、アルゼンチン以外の作家にとって「亡命先」であり、「避難所」となってきた。迫害を受けた人びとがアルゼンチンに移住して、出身の文化について書き続けた場合もあるし、一定のあいだアルゼンチンに居を構え、現地の知識人らとの交流し、執筆を進めた外国の作家もいる。定期的にアルゼンチンを訪れて文化的な活動を行なった者もいる。彼らは多くの場合、現地の文化活動に影響を与えたり与えられたりしながら、アルゼンチンで自分の作品が出版される機会を得ている²。こうしたことが可能なのは、アルゼンチンにそれを受け止める土壌があるからだろう。

本稿では、キューバ作家のアントニオ・ホセ・ポンテにとってもアルゼンチンが「亡命先」となっている事例を提示することを目的として、この作家とアルゼンチンとのつながりについて追い、彼の作品を考察する。後半はポンテの受容を可能にしたと考えられるカ

リブ文学の研究動向を、アルゼンチンでの関連文献の出版状況や人的交流の様態から概観する。

1. アントニオ・ホセ・ポンテとアルゼンチン

キューバの作家アントニオ・ホセ・ポンテの存在は、やはりキューバ出身の作家ビルヒリオ・ピニェーラについて小さな研究書をキューバで出したことがある以外には注目していなかった。ところがアルゼンチンでは彼の作品の出版が相次いでいる。雑誌では特集が生まれ、彼を論じた研究書も刊行され、学会でも彼の作品についての研究発表を聞くことができる。このキューバ人作家とアルゼンチンとの関係はどのように築かれたのだろうか。

ポンテは1964年にキューバの地方都市マタンサスで生まれた。16歳でハバナに移り、水力技師や映画脚本家、文学教師として生計を立てていたようである。アルゼンチンの文学研究者ルベン・チャバードが文学研究のための奨学金を得てキューバに渡ったのはベルリンの壁が崩壊した年のことだった。彼はポスト冷戦時代のハバナで、革命後に生まれた世代の若手作家たちと知り合い、そのなかにアントニオ・ホセ・ポンテがいた。交流を深めるうち、ポンテはチャバードに自分の書いたものを託し、チャバードはそれをアルゼンチンの研究者テレサ・バシーレに渡す。こうしてアルゼンチンにポンテの存在が知られたのだった。ポンテは1993年、ピニェーラ論『*La lengua de Virgilio* (ビルヒリオの言葉)』を出し、2年後にはキューバの批評賞を受賞しているから、体制とは問題を起こしていなかった。

しかしその彼も、90年代半ばからはキューバ国内での発言を控えるようになる。後で扱う1997年の『*Las comidas profundas* (深遠なる食べ物)』の初版はフランスで出し、フィクション作品もアメリカで出している(英訳版)。アルゼンチンの研究者との共著『*El abrigo de aire: Ensayos sobre literatura cubana* (空気の外套——キューバ文学についての試論)』(2001)がアルゼンチンでの初めての仕事である。この本には、おそらく初めてアルゼンチンに渡った彼のテキスト——91年に書かれたもの——と、表題作である、ホセ・マルティがニューヨークに残した外套についての試論が収められている。

2003年、ポンテはキューバ芸術家作家協会(UNEAC)から退会処分を受ける。2年後に行なわれたテレサ・バシーレとのインタビューで彼は、キューバ国内での立場について以下のように語っている。「キューバ人で私の本を読む人はほとんどいません。彼らは何年か前までに私が出版した本の読者ですが、それらの本はもう本屋にはありません。図書館にはあるかもしれませんが、キューバ人の読者は存在しないのです。読者は亡命キューバ人か、キューバ人ではない人たちです。私はキューバでは出版しません。最初は検閲、検

読委員会のことですが、それを避けて出版しないようにしました。その後災難があり、私に降りかかってきて、それはひとつの措置ですが、私はキューバで出版できなくなりました。キューバの雑誌でも発表できませんし、公に話すこともできません。講演をすることもありません。キューバに、私が公に作家として活動できる場所はないのです。」³

国外での発表媒体は、1996年から亡命キューバ人がマドリードで出している「*Encuentro de la cultura cubana*」誌が中心になる。この雑誌は革命後のキューバ文化に起きていることについて、主に島を出た人たちが書き手となって論じている。そして2006年、ポンテはついにマドリードに亡命する。マドリードでは引き続き「*Encuentro*」に協力しながら、2009年に「*Encuentro*」が廃刊になると、今度は亡命キューバ人がウェブ版で出している「*Diario de Cuba*」の副編集長を務めることになる⁴。

生活の拠点はスペインにありながらも、アルゼンチンでは2008年にはポンテの研究書がテレサ・バシーレを中心に編まれ、その2年後にはフランスで初版が出てからほとんど流通していなかった評論集『*Las comidas profundas*（深遠なる食べ物）』と、アメリカで英訳版が先に出ていた短篇集『*Corazón de Skitalietz*（放浪者のこころ）』が刊行された。どちらともアルゼンチンの研究者による解説が読解の手引きとしてついている。

このように、ポンテとアルゼンチンの研究者との交流はベルリンの壁崩壊のときに始まり、彼がキューバで細々と出版していた時期、国内では沈黙を始めて国外での評価が高まる時期、そしてマドリード亡命後も続いている。そのあいだを通じてアルゼンチンではポンテに関わる出版物が次々に出ているのである。

2. 『深遠なる食べ物』

ではアルゼンチンで出たポンテの本について見ておきたい。まずは再版された『*Las comidas profundas*（深遠なる食べ物）』である。タイトルが示すように、この本は食べ物を扱い、キューバ料理やキューバ伝来の食材に関する文献学的とも哲学的とも言えるような考察が展開される。といっても文献リストがついているような学術的な文章ではなく、50ページほどの小冊子で、ポンテ作品の入門として便利な本である。

ポンテはこの本を、キューバで食糧が不足していることをほのめかすところから書き始めている。彼のテーブルには、果物や肉の絵が描かれたビニールのテーブルクロスがかかっている。もちろん手に入らない食べ物だ。ポンテはテーブルに向かいながら食べ物についての空想にひたり、それを題材に書くことで空腹を満たそうとする。空腹を空想で埋めるというサヴァイヴァルは、日常の苦しみを笑い話（*chiste*）で忘れるキューバ人の現実の切り抜け方を思わせもするから、現実的な感覚が彼の出発点にある。

全六話のうち、第一話はパイナップルの話である。ポンテはパイナップルがスペインに運ばれたときのエピソードを想起し、読者を16世紀のセビージャの宴に連れて行く。ポンテの想像力によって、ハプスブルグの王、カルロス五世とパイナップルの出会いがどのようなものであったのか、彼がパイナップルにどのように反応したのかがつづられる。

パイナップルとカルロス五世

カルロス五世は自分が統治する新大陸に足を踏み入れることはなかった。したがって彼はその地から運ばれた宝物、人びと、食物によって新大陸を想像するしかない。そのなかでカルロス五世をもっとも魅了したのが、矛盾した内容の噂を聞いたパイナップルだったので、現物と対面するのを心待ちにしていた。セビージャの宴の会場に、新大陸から連れてこられた先住民やオウムや黄金と一緒に、パイナップルがいよいよ到着する。

地中海の庭園が彼ら〔宴の出席者たち〕を取り囲む。オレンジの木、キンバイカの木、香りをつけた水、ヤシの香りを抑えてパイナップルの香りが城の庭園を浸す。〔中略〕カルロス五世はパイナップルをハプスブルグの鼻に近づける。その突き刺すような香りに目が回る。その香りを知覚するにはまるで大海を横断することが必要であり、その香りには横断にともなう風がすべて詰まっているかのようなようだった。皇帝が両手で抱えているものは帝国全体の空気のなだった。〔中略〕カルロス五世はパイナップルの荘厳さを発見し、かくなる香りは王にこそ相応しいと考えるに至った。パイナップルは果物のなかの王であり、カルロスは王のなかの王だった。(p.11-12)

カルロス五世はスペイン中から食材を運ばせるほどの美食家だったが、パイナップルの「ひどく超越的な味」(p.12)を味わう快楽は罪を犯すことに似ていた(p.12)。良心の人カルロスはそれを味わうことができるだろうか。ポンテは以下のように記している。

彼〔カルロス五世〕は、自分がそれ〔パイナップル〕を一度でも食べるのに相応しくないことがわかっていた。というのは、〔食べてしまえば〕それを二度と手に入れることができず、これまでになく船の到着を気かけながら余生を送ることになるからだ。（〔チャールズ・ラムが言うように、恋人のように嘔みついてくる〕パイナップルを食べることによって、母フアナの狂気の愛が自分に感染するのを彼は恐れたのだった。

皇帝とパイナップルのあいだには未知の大海が広がるだろう。

皇帝は偉大な君主が感じる悲しみに襲われる。隅々まで足を踏み入れることのできない領土をもった君主の悲しみである。とうとう皇帝はパイナップルに口をつけなかった。どの貴族が食べたのかを知ろうとしなかった。(p.14)

このように、カルロス五世はパイナップルを食べてしまえば、狂気にとりつかれたようにパイナップルを欲しがり、自制心を失うのではないかと恐れて食べるのを寸前で拒否する。これが第一話で差し出されるエピソードである。パイナップルの拒否の場面でポンテは以下のように書き添えている。「キューバの食べ物は、カルロス五世が食べないそのパイナップルによって始まると言えるだろう」(p.14、傍点引用者)。

キューバ性の始まり

王とパイナップルとの対面は、支配者の王と、被支配地からもたらされた物との関係である。支配者は海の向こうの被支配地からもたらされた果物にさまざまな期待を寄せる。対面したとき、最初は酔うが、次第に戸惑い、最後は恐怖に変わり、食べることができない。ポンテは、支配者に食べられることを拒否したパイナップルに、キューバなるものの「始まり」を見ている。この始まりとは何だろうか。

パイナップルを味わう快樂が罪に似た快樂であるというのは、支配者がキューバの文化を食べ尽し、殲滅する快樂のことだろう。しかしその快樂を拒否するということは、キューバを食べ尽せないということだ。殲滅できない何か、ヨーロッパが征服できない何かがあるからだ。それが「ひどく超越した味」であり、征服者の論理を越えた何かである。「ヨーロッパ全体どこに行こうが、周囲を何マイル行ったところで」(p.13)、そのようなものはないのである。ヨーロッパにはないその「深遠さ」こそが、ポンテの言いたい「キューバ」である。

したがってこの文章では、ヨーロッパとは異なるものとしてのキューバの独自性を謳う思想がパイナップルを通じて訴えられている。第六話では島のオリエンテ（東方）に伝来する飲み物アリニャード(aliniado)のエピソードが語られ、本全体で「キューバ性」なるものが、ヨーロッパとは異なるものとして提示されている。

革命と芸術

一方で、この第一話の魅力は、ポンテがこの文章を通じて何を伝えようとしているのかという疑問に導かれるところにもある。パイナップルは何かのメタファーなのだろうか、この話は歴史的に事実なのだろうか、ポンテの意図の解説に誘われるのだ。実際、ポンテ研究の第一人者であるテレサ・バシーレは解説に挑み、彼女はここに描かれるカルロス五世とパイナップルの関係を、政治権力と芸術（とくに文学）の関係と見ている。バシーレの解説を要約してみよう。

パイナップルの特徴には、「ひどく超越した（味がする）」(p.12)、「パイナップルを味わうことは罪深いというのではないが、罪に似た快樂である」(p.12)とあり、これはパイナップルを芸術のメタファーとしていることの証左である。パイナップルの殻は唇を傷つけかねない危険なものだが、これも芸術を味わう際の危険を意味している。芸術を味わうのは罪深い行為であり、その罪深さを「消化」できない恐れを抱いたがゆえに、カルロス五世はパイナップルに手をつけられなかったのだ。パイナップルはキューバ文学史では、フリアン・デル・カサル、ビルヒリオ・ピニューラ、レサマ＝リマなどによってキューバ文化の象徴として描かれ、政治権力とは対立するものだった。その意味でもポンテの提示するパイナップル＝芸術、カルロス五世＝政治権力の対立は明確である。強欲な政治権力はいかなるものにも支配の手を伸ばし、一方、「深遠な」芸術はそれから逃れようとする。カルロス五世がパイナップルを食べるのを拒否したことは、権力側による芸術の拒否のことを指す。権力とはキューバ革命政権のことであり、芸術とは革命政権によって拒否された芸術家集団のことである。もちろん書き手のポンテもまた拒否されたパイナップル（芸術）の側にいる。そして拒否されたものこそが「キューバ」なのである……

この解釈は革命以降の政治と文化の関係を考えると、とても説得力がある。革命政権は芸術家を、検閲などを通じて抑えこんできた。ポンテがどこかでその緊張関係をほのめかしておきたいと考えることは、先に引用したインタビューを踏まえても、十分にあり得る。バシーレの解釈は、ポンテが直截的には書かず、レトリックを用いて書いたその意図を読み取ったものと言えらるう。

偽書としてのパイナップル話

レトリックに満ちたこの文章のもうひとつの魅力は、パイナップルをめぐる話が歴史的に事実なのかどうか分からない点にもある。キューバの「始まり」が真偽の定かでない、ぼかされた形で提示されることで、読者はその不確かさのなかに宙づりにされてしまうのだ。というよりも、読者を宙づりの状態に置くことにこそ目的があるようにも見える。この文章ではカルロス五世の人となり、パイナップルの描写に力点が注がれ、それは真実味を帯びさせる。一方で、その一切がポンテの空想の産物のような印象も十分に備わっている。どうしてポンテはこのように惑わせる書き方をしたのだろうか。バシーレの解釈を踏まえたうえで、ポンテが革命政権に対してほのめかしたもうひとつの事柄の読み解きを行なってみたい。

1964年生まれのパンテは、時代からいって「キューバ革命」以降の作家である。彼が受けた教育は革命後の教育制度であり、そこで教えられるキューバ文学史は公的(oficial)なものであり、革命にとって都合のいい作家たちや作品たちが、革命の文化教育に都合よく

編成されている。文学は一元的に管理され、多様な読みは一応ありえない。革命側の作家が尊重され、反革命側の作家は尊重されない。この方針は過去の文学者にも応用される。独立戦争のときに行動した作家ホセ・マルティが賞揚され、行動しなかった作家フリアン・デル・カサルは賞揚されない。「革命的な真実」に満ちた公的なキューバ文学史が「正典」なのである。

このことを踏まえれば、戸惑いを起こさせるポンテの偽書としての「パイナップル話」は、そういう微動だにしない「正典」を脱コンテクスト化するような文章である。静止した「キューバ文学史」に対し、ポンテの提示するキューバの「原点」は、真偽の定かではない、真実と嘘のあいだを行ったり来たりする動的な「キューバ性」にある。信じるか否かは読者の判断に任されている。嘘だと思えばそれでもいい。本当だと思えばまたそれでもいい。正典を真似て揺るぎない真実を書いたかのようにも見えるときもあるし、正典を挫くようにどこかに罫を仕掛けて書いたように見えるときもある。その二重性は実に巧みだ。

この文章を書いたときポンテはキューバ国内にいた。パイナップルを通じて拒絶されている芸術家をほのめかし、また革命文学史に揺さぶりをかける。革命政権によって編成された正典を、内側から内側の言語を使って解体しようとしているようでもある。こうして見れば、ポンテの試みは旧イギリス、フランスの植民地作家たちのポストコロニアル文学と通じるところがあるとも言えるだろう。ポンテにとって「革命政権の時代」こそ読み替えなければならない「帝国の時代」なのである。

3. 短篇集『*Corazón de Skitalietz*』

フィクション作品としては、『*Corazón de Skitalietz* (放浪者のこころ)』という表題作を含む短篇集が、やはり2010年に出ている。Skitalietzという単語はロシア語で放浪者の意味らしいのが表題作を読むと分かる。

「*Viniendo* (来る途中)」という短篇は、ソ連留学体験をもつキューバ人を描いたものだ。恋人同士の二人を中心に、ソ連体験のある人物が次々に出てくる。留学中にソ連が消滅し、キューバも変わり、恋人関係も解消した。彼らは留学が終わった時点で祖国に戻るべきか否か迷い、それぞれ異なる経路をたどる。

この話から漂うのは、戻るべき中心を失ってしまい、彷徨するキューバ人の寄り辺ない感覚である。主人公のうち男のほうは、ソ連に残る方法を探してみても妙案がなく、帰ることにするが、結局「流刑」(p.8)だと思いながら帰路につく。ルームメイトの男は船旅で帰ることにするのだが、それは「遭難」(p.7)してしまいたいからだった。

故郷を離れているあいだに戻るはずの故郷を喪失したため、故郷に戻っても戻った気がしない。実際、帰国しても「途方に暮れた気がする」(p.8)。ソ連への留学生を多く抱えていたキューバで、そういう苦悩をもったキューバ人は少なくはなかっただろう。キューバ国内でも、ソ連との関係が変わったため人生が変わる人がある。ロシア語の教師や生徒である。主人公はロシア語の家庭教師のもとに帰国の挨拶に行ってみたが、そこで紹介されたロシア語を学ぶ若者はロシアに留学するつもりはない。教師もロシア語教室を畳むことにしている。

故郷喪失した人びとのなかにはキューバに戻らない人もいる。主人公の女の方は男と別れたあと、ソ連で中国人の女と暮らし、インド映画を見ては甘いものを食べ、体重も増えて性格も変わる。そしてアラブ系の男たちとキューバではないどこかへ消えていく。もはやキューバ人であることをやめるのである。

キューバ人にとって戻るはずの中心は革命であるが、この短篇からはその革命が終わってしまった感覚が伝えられる。短篇内のどこにも革命が終わったとは書かれていない。また、革命への幻滅や無意味さや他の国々への憧れ、亡命への意志もほのめかされていない。元恋人はキューバ人であることをやめ、消えてしまっただけである。この小説はソ連を失ったキューバ人の哀しみを描いているように読める。そう読めば、ポスト冷戦時代のキューバ人の現実的な感覚を描いた小説である。にもかかわらずここには、間違いなく訪れるはずのポスト・キューバ革命の時代に生きる人びとが、つまり革命が失敗に終わったあとの人びとのディアスポラがすでに予感されてさえている。根無し草として生きる人びとの底なしの不安が顔をのぞかせているようにも見える。その意味では危険な小説かもしれない。パイナップル話で見たような二重性に似て、この小説をどう読むかは読者の判断に任されている。タイトルの「Viniendo (来る途中)」とはvenir (来る)の現在分詞形である。ソ連に留学したキューバ人が帰って「来る途中」という意味にとっていいだろう。しかし、ポスト・キューバ革命の時代が「来る途中」のようにもとれる。キューバは変わりつつある。その移動の途中にある。現在分詞形はそういう流動性を的確に言い表している。

4. アルゼンチンにおけるカリブ文学の研究動向

以上のように、アルゼンチンで刊行された『深遠なる食べ物』と『放浪者のこころ』はともに、キューバ革命そのものに疑問を付すようなものではなく、むしろ現実的な感覚を出発点にポスト・キューバ革命の時代を見据えた内容になっている。これらの物語をポンテはキューバ国内で書いていたが、国内では出版せずにアルゼンチンでの出版に賭けた。このことは、ポンテがすでにキューバにいながら、アルゼンチンに「亡命」していたこと

を示しているだろう。ポンテより半世紀近く前にアルゼンチンを文学的な亡命地としたのは、ポンテが最初に取り組んだ作家であるビルヒリオ・ピニェーラだった。ピニェーラはアルゼンチンで、キューバでは叶わなかった自分の短篇集や小説を出版した。アルゼンチン時代に残した多くの仕事によって彼は作家としての足場を築くことができたのである。キューバの同じ地方に生まれたポンテがアルゼンチンで短篇や評論集を出すとき、ピニェーラのことを思い出しているに違いない。

亡命キューバ人の拠点と言えば、マイアミとマドリードが群を抜いて大きい。しかしポンテの経緯を見ると、アルゼンチン（とくにブエノスアイレス周辺）も拠点のひとつになっているのである。見方を変えれば、アルゼンチンにキューバの作家や作家研究の環境が整っているということでもある。ここからはアルゼンチンにおけるキューバを含むカリブ文学の研究動向を追い、ポンテを取り巻く環境を見ておきたい。

カリブ研究班誕生

2005年、カリブ文学の研究について複数の動きがあった。

まず、ブエノスアイレス大学のイスパノアメリカ研究所に「Grupo de estudios caribeños（カリブ研究班）」が誕生したのである。研究班のリーダーを務めるのは、ブエノスアイレス大学（UBA）のラテンアメリカ文学研究者で、現代ラテンアメリカ文学について数多くの研究書を出しているセリーナ・マンソーニである。研究班は研究会や読書会を開き、またラテンアメリカ各地の研究者とのネットワークを築いている。マンソーニと数名の若手研究者から成るこの研究班が中心となって、カリブ論集を二冊出すことになる。

一冊目は『*Memorias del silencio*（沈黙の記憶）』（2010）といい、文学研究書の出版で名高いコレヒドール出版（ブエノスアイレス）から出ている。もう一冊の論集は『*Ínsulas y poéticas: Figuras literarias en el Caribe*（島と詩学——カリブの文学者）』（2012）である。前者はカリブ地域だけでなく、中央アメリカの作家（セルヒオ・ラミレス、アウグスト・モンテロソ、オラシオ・カステジャーノス・モヤ）やベネズエラといった、これまであまり取り上げられることのなかった地域の作家も扱い、カリブ地域からはエメ・セゼール論、ジャマイカ・キンケイド論が収録されている。しかしこの論集で注目すべきは巻頭にエドゥアルド・グリッサン（マルチニーク）とカマウ・ブラスウエイト（バルバドス）の対話（1991年にメリーランド大学で行なわれたもの）のスペイン語訳が収められていることで、スペイン語圏のカリブ研究者にとって貴重な内容となっている。

この論集を出版したコレヒドール出版は、2012年、エドゥアルド・ラロ（プエルト・リコ）の『*Simone*（シモーヌ）』を皮切りに、カリブ文学コレクション「Archipiélago Caribe（カリブ群島）」をスタートさせた。スペイン語圏に限らず、カリブの文学を古典から現

代まで、エッセイ、小説、詩も含めて研究者による解説付きで出版するとのことである。今後どのような作品がコレクション入りするのか注目に値するが、このコレクションの編者は先のカリブ研究班のメンバーである。したがって研究班の成果とも言えるだろう。

研究書、雑誌、人的交流

研究書の出版ではポンテの本も出版しているベアトリス・ビテルボ出版が有名だ。ボルヘスの作中人物にちなんでつけられたこの出版社はアルゼンチン第三の都市、ロサリオに本社がある。マヌエル・プイグやセサル・アイラなどアルゼンチン文学に限らず、スペイン語以外の外国文学の翻訳書も出している。

2005年、この出版社からカリブ文学を論じたものとして、マリア・フリヤ・ダローキ『*Escrituras heterofónicas: Narrativas caribeñas del siglo XX* (ヘテロフォニーの記述——20世紀カリブの小説)』(2005)が出た。この本では、英語で書くエドウィージ・ダンティカ(ハイチ)やフランス語で書くマリーズ・コンデ(グアドループ)、スペイン語圏からはリノ・ノバス・カルボ(キューバ)、エドガー・ロドリゲス・フリヤー(プエルト・リコ)が分析の対象となっている。カリブ世界を把握するための理論的な枠組みとしては、フェルナンド・オルティス(キューバ)、アンヘル・ラマ(ウルグアイ)、ガルシア・カンクリーニ(アルゼンチン)、グリッサンといった面々が参照される。

ダローキの研究の主眼は、暴力を記憶する装置として小説を分析することにある。ハイチ人が虐殺された事件を描いたダンティカの『骨狩りのとき』と、プレストル・カスティージョ(ドミニカ共和国)の歴史小説が比較検討されたり、セイラムの魔女裁判を扱ったコンデの『私はティチューバ』が分析される。文献リストを見ると、ダンティカやコンデの小説は、スペイン語に翻訳された文献が参照されている。カリブ地域の小説がいくつか取り上げられていくうちに、タイトルにあるヘテロフォニーの概念がつかめてくる。著者は、異なった言語(ヘテロ)で語られるカリブ共通の物語の響き(フォニー)をカリブ文学として捉えているようだ。

さらに2005年には、専門的な文芸誌としてラテンアメリカ文学批評誌「KATATAY(カタタイ)」が創刊された。先に引用したポンテのインタビューが掲載されたのはこの雑誌である。「カタタイ」とはケチュア語で「震え」を意味し、ホセ・マリア・アルゲータス(ペルー)がスペイン語の詩のタイトルにつけているところからとられた。一年に二回出す予定だったが、一年一号に落ち着いている。判型はA4版と大きく、150ページ以上のボリュームがある。毎号いくつかの地域や作家に絞った特集が二、三本生まれ、作家論や作品論、作家へのインタビューがまとまっている。特集のほかに文学研究書の書評、発掘された古典の一部などが掲載されている。

この批評誌は創刊以来、カリブ地域の文学に関する特集を組むことが多い。スペイン語圏で見ると、1/2号（2005）は「Nuevo ensayo cubano（新しいキューバ評論）」と「Poesía niuyorriqueña（ニューヨリカンの詩）」、3/4号（2006）は「Archipiélago puertorriqueño（プエルト・リコ群島）」、6号（2008）は90年代のプエルト・リコ文学、8号（2010）はキューバ作家ペドロ・ファン・グティエレスの特集といった具合である。プエルト・リコ文学への注目が高い。もっとも、7号（2009）では仏語圏と英語圏のカリブ文学にも目を向けている。仏語圏作家たちによるサルコジ宛の宣言書（「フランコフォニー」ではなく、「文学—世界」という名称を使うように要請する内容）が翻訳され、それに対する当局からの回答、また、翻訳者による解説が掲載されている。また、英語圏カリブのブラスウエイの特集があり、ブラスウエイの評論と詩の翻訳およびブラスウエイ論が二本載っている。

この雑誌でブラスウエイ論を書いている研究者フロレンシア・ボンフィグリオは、カタタイ出版（雑誌「KATATAY」を出しているのと同じ出版社）から、ブラスウエイの評論集『*La unidad submarina*（海の下の統一）』（2010）を出版している。この評論集には、ブラスウエイの博士論文の一部「ジャマイカ奴隷の民俗文化」と「声の歴史——英語圏カリブ詩における国民言語の発展」が収められ、ボンフィグリオによる丁寧な解説とブラスウエイのインタビューも併録されている。

エテルナ・カデンシア（ブエノスアイレス）は2008年に創業したばかりの出版社である。カリブ文学の名を掲げたコレクションはないものの、日本の白水社と同名の「Ex Libris（エクス・リブリス）」というシリーズがあり⁵、短篇集『*El futuro no es nuestro*（未来は我々のものではない）』にはプエルト・リコ、ドミニカ共和国、キューバの女性作家の短篇が収められている⁶。この短篇集は若手作家を中心に、ある程度一貫した編集方針でまとめられているため、短篇集としての完成度が高い。今後、何らかの形で紹介されてしかるべき作家たちである。

こういう文献に出会うには、ブックフェアや文学祭、あるいは学会が欠かせない。ブエノスアイレスでは例年4月から5月にかけてブックフェアが開かれ(Feria Interancional del Libro de Buenos Aires)、9月には小規模ながら文学祭(Festival Internacional de Literatura en Buenos Aires)が開かれる。開催期間中は研究者や作家による講演会、朗読会、ラウンドテーブルなどが市内のあちこちで行なわれている。ブエノスアイレス近辺の学会としては、ブエノスアイレス大学が2年ごとに開く学会（2012年の場合、11月27日から12月1日）と、ブエノスアイレスからバスで一時間ほど行ったラプラタ市にあるラプラタ大学が3年ごとに開く学会（2012年の場合、5月7日から9日）があり、アルゼンチン中の文学研究者が発表に訪れる。プログラムを眺めるだけでも大まかな研究動向は確認できる。

4.1 スペイン語圏カリブと英仏語圏カリブの対話の可能性

このような研究動向のなかでとくに注目に値するのはブラスウェイトとグリッサンの対話であり、スペイン語圏カリブと英仏語圏カリブの差異を考えるうえで大きな示唆を与えてくれる。

ひとつは、スペイン語のcriollo/criollaと、英語圏のcreole・仏語圏のcréoleとの差異の問題である。対話を翻訳したチリ人研究者の指摘によれば、スペイン語のcriolloの“i”はcrianza（飼育、養育）という単語に近く、一方、英語のcreole（フランス語のcréole）の“e”はcreación（創造）、creencia（信念、信条）という単語に近いという。このことから、スペイン語圏のクリオーリョは民衆を「育てる者」としての意識が強かったと言えそうだ。彼らは西洋との連続性を追い求め、他のカリブ地域よりも西洋化が激しかったのである。

そのことから導かれるもうひとつは、民衆文化との距離の違いである。英・仏語圏植民地において民衆文化は知識人と有機的な関係にある。それを示すのが、対話でブラスウェイトが説明する「国民言語」であり、グリッサンの「クレオール語」である。この言語が知識人と民衆のあいだをつなぐ回路となっている。一方、スペイン語圏植民地では、知識人はエリートで、民衆文化と距離がある。彼らクリオーリョ・エリートは民衆の教化に励み、それが影響してスペイン語圏カリブの「クレオール語」はコロンビアのカリブ地方の一部を除いてほとんど消滅してしまったのである。

そして導かれるのは、知識人のカバーする領域の違いである。スペイン語圏カリブから、ブラスウェイトやグリッサンの対話に加わって持論を展開できるような人物は誰だろうか。ブラスウェイトもグリッサンも思想と文学の双方をカバーできる力量があるが、キューバの人類学者フェルナンド・オルティスには文学の仕事がなく、キューバの詩人ニコラス・ギジェンには思想面の仕事がない。以下の図は、どのジャンルに仕事を残したかを○と×で示したものである。知識人が民衆と離れ専門分化してしまったことにより、スペイン語圏カリブでは複数のジャンルにまたがって仕事をする人が少ないのかもしれない。

| | 思想 | 文学 |
|----------------|----|----|
| 英語・仏語圏 | | |
| ブラスウェイト : | ○ | ○ |
| グリッサン : | ○ | ○ |
| スペイン語圏 | | |
| フェルナンド・オルティス : | ○ | × |
| ニコラス・ギジェン : | × | ○ |
| アントニオ・ホセ・ポンテ : | ○ | ○ |

その点でアントニオ・ホセ・ポンテは対話に参加できるひとりのように思われる。キューバ性を構想する思想的な試論があり、それは先に見たように、英・仏語圏のポストコロニアルと通底している。また文学ジャンルではディアスポラ感覚に満ちた小説がある。他のカリブ地域の文学との類似と差異に迫るときにポンテの作品は有用な参照例になるだろう。

終わりに

本論ではまず、アントニオ・ホセ・ポンテとアルゼンチンとのつながりとアルゼンチンで出版されたポンテの作品を分析した。その結果、ポンテにとってアルゼンチンが彼にとっての「亡命地」と言えるだけの背景は確認できた。後半では彼を受け入れる土壌となるアルゼンチンのカリブ文学研究の動向を追った。見たように、アルゼンチンではスペイン語圏のカリブ文学もさることながら、英・仏語圏の研究も進みつつある。カリブ文学の研究グループは成果をいくつかの形で出し、研究者のネットワークを築いている。学会や文学関係のイベントなどを通じて研究者や作家の交流も盛んである。雑誌や単行書の出版活動のなかでもカリブ文学は一定の地位を占めている。

とはいえ、スペイン語圏カリブの作家のほうが英・仏語圏カリブの作家よりも多様な面から論じられている。ポンテ以外のカリブの作家でアルゼンチンが亡命地となっているのは、やはりスペイン語圏のプエルト・リコの作家である。英・仏語圏のカリブ作家にとってアルゼンチンが目に入っているのかどうかは分からない。しかしアルゼンチンのこうしたカリブ文学研究の土壌から、ポンテひとりを亡命キューバ人として特別に受容しているわけではないことがわかる。アルゼンチンでは他のカリブ地域の作家が取り組む問題群と参照できるような作家としてポンテを読み進めることが可能になっている。

注

¹ 本稿で言及される土地はアルゼンチン全域ではなく、ブエノスアイレスやプラタ、ロサリオだが、その三都市を言い表す適切な固有名詞がないため、アルゼンチンという国名を用いることにした。

² ここで念頭に置いているのは、ルベン・ダリーオ（ニカラグア）、オルテガ・イ・ガセー（スペイン）、フランシスコ・アヤラ（スペイン）、イディッシュ語作家たち、ヴィトルド・ゴンブローヴィッチ（ポーランド）、ビルヒリオ・ピニェーラ（キューバ）、日系でアルゼンチン在住のアナ・カスミ・スタールなどである。

³ “Entrevista a Antonio José Ponte”, *KATATAY*, año 1, número 1/2, junio 2005, La Plata, p.32.

⁴ ウェブ版のキューバ文化誌としては他に「Habana elegante」があるが、編集委員会の大多数はアメリカ大陸在住の知識人が占めている。

⁵ クレア・キーガンの『青い野を歩く』はどちらの「エクス・リブリス」にも入っている。

⁶ そのうちのひとり、キューバのエナ・ルシーア・ポルテラの「Huracán ハリケーン」は邦訳されている（『群像』2011年11月号掲載）。

参考文献

Basile, Teresa(comp), *La vigilia cubana: Sobre Antonio José Ponte*, Beatriz Viterbo Editora, Rosario, 2008.

Daroqui, María Julia, *Escrituras heterofónicas: Narrativas caribeñas del siglo XX*, Beatriz Viterbo Editora, Rosario, 2005.

El futuro no es nuestro:Nueva narrativa latinoamericana, Eterna Cadencia, Buenos Aires, 2009.

Kamau Brathwaite, *La unidad submarina: Ensayos caribeños(Selección, estudio preliminar y entrevista de Florencia Bonfiglio)*, Katatay Ediciones, Buenos Aires, 2010.

Lalo, Eduardo, *Simone*, Ediciones Corregidor, Buenos Aires, 2012.

Ponte, Antonio José, Bernabé, Mónica, Zanin, Marcela, *El abrigo de aire: Ensayos sobre literatura cubana*, Beatriz Viterbo Editora, Rosario, 2001.

Ponte, Antonio José, *Las comidas profundas*, Beatriz Viterbo Editora, Rosario, 2010.

Ponte, Antonio José, *Corazón de Skitalietz*, Beatriz Viterbo Editora, Rosario, 2010.

Salto, Graciela(ed.), *Memorias del silencio: Literaturas en el Caribe y Centroamérica*, Ediciones Corregidor, Buenos Aires, 2010.

Salto, Graciela(ed.), *Ínsulas y poéticas: figuras literarias en el Caribe*, Editorial Biblos, Buenos Aires, 2012.

本稿で言及する出版社（ウェブ版も含む）、学会、イベントの公式 URL は以下のとおり（最終アクセス日はすべて2012年9月19日）。

Beatriz Viterbo Editora(<http://www.beatrizviterbo.com.ar/>)

Ediciones Katatay(<http://www.katatay.com.ar/>)

Ediciones Corregidor (<http://www.corregidor.com/>)

Eterna Cadencia Editora(<http://www.eternacadencia.com/home.asp>)

Feria Interancional del Libro de Buenos Aires(<http://www.el-libro.org.ar/>)

Festival Internacional de Literatura en Buenos Aires(<http://filba.org.ar/>)

Congreso Internacional de Letras [ブエノスアイレス大学主催の学会] (<http://www.filo.uba.ar/cil>)

Congreso Internacional Orbis Tertius [ラプラタ大学主催の学会] (<http://citclot.fahce.unlp.edu.ar/>)

Grupo del estudio caribeño(<http://grupocaribe.blogspot.com.ar/>)

Diario de Cuba(<http://www.diariodecuba.com/>)

Encuentro de la Cultura Cubana(<http://www.cubaencuentro.com/revista/revista-encuentro/>)

Habana elegante(<http://www.habanaelegante.com/>)

Argentina como asilo literario

Sobre la lectura de Antonio José Ponte y el estudio de la literatura caribeña

KUNO Ryoichi

Los escritores pueden seducir a más lectores en el lugar en el que nacen, crecen y tienen algunos vínculos sociales, que en otros lugares. Ellos, en general, escriben imaginando a los posibles lectores cercanos, y escogen la lengua, el género y el contenido de la escritura, dependiendo, hasta cierto punto, del lugar al que pertenecen. Sin embargo, esto no significa que no existan lectores en los lugares con los que los escritores no tienen relación alguna o tienen menor relación. Pues es normal que las obras estén traducidas y publicadas en otros lugares. La historia de la literatura consiste de la historia de las recepciones y las lecturas entusiastas en los otros lugares con los que los propios escritores no tienen ninguna relación.

En el caso de los autores que no pueden publicar su obra en su propio hogar por ciertas causas —creo que hay muchos escritores que sufren eso—, aquellos lugares donde haya editoriales que publiquen su obra y lectores entusiastas constituirán un “asilo literario”, aunque esos escritores no vivan allí. En este sentido, Argentina (específicamente Buenos Aires) ha sido un asilo literario para escritores extranjeros. En este estudio se analiza esta cuestión en relación a los siguientes puntos: primero, el caso del escritor cubano Antonio José Ponte, y su relación con los círculos literarios en Argentina; y segundo, el desarrollo en particular del estudio de las literaturas caribeñas en Argentina.